

病害虫発生予報 第1号

(向こう1か月間の発生予報)

I 総括表

作物名	病害虫名	地域	発生量	発生時期	摘要
麦	赤かび病	全域	並	並	
	さび病・うどんこ病	全域	並～やや多	並	
水 稲	苗立枯病	全域	並～やや多	並	
	ばか苗病	全域	並	並	
	細菌性病害(もみ枯細菌病及び苗立枯細菌病)	全域	並～やや多	並	
りんご	赤星病	全域	並	やや早	
	うどんこ病	全域	並	やや早	
	黒星病	全域	並	やや早	
	腐らん病	全域	並	—	
	アブラムシ類	全域	並	やや早	
	キンモンホソガ	全域	並	並	
	ナシヒメシンクイ	全域	並	やや早	
	リンゴハダニ	全域	並	並	
	リンゴコカクモンハマキ	全域	並	並	
なし	赤星病	全域	やや多	やや早	
	黒星病	全域	並	やや早	
	黒斑病	全域	並	やや早	
	ハダニ類	全域	並	やや早	
	リンゴコカクモンハマキ	全域	並	やや早	
もも	せん孔細菌病	全域	並	やや早	
	縮葉病	全域	並	やや早	
	ナシヒメシンクイ	全域	並	やや早	
	コスカシバ	全域	並	並	
	モモハモグリガ	全域	並	やや早	
	カメムシ類	全域	並	並	

ぶどう	晩腐病	全域	並	並	
	黒とう病	全域	並	並	
	ブドウトラカミキリ	全域	並	並	
うめ※	かいよう病		—	—	
	黒星病		—	—	
施設果菜類	灰色かび病	全域	並	並	
施設きゅうり	うどんこ病	全域	並	並	
アブラナ科野菜	コナガ	全域	並	並	
レタス類	ナモグリバエ	全域	並	並	
アスパラガス	茎枯病	全域	並	並	
	ジュウシホシクピナガハムシ	全域	並	並	
たまねぎ	べと病	全域	並	並	
野菜・花き類 全般	アザミウマ類・アブラムシ類	全域	並	並	
	ハダニ類	全域	並	並	

※うめについては、令和5年4月から巡回調査を開始するため、発生量及び発生時期は「—」とした。

II 向こう1か月の天候の見通し及び予報の根拠にかかる気象要因

1 向こう1か月の天候の見通し (気象庁 令和5年4月13日発表)

○関東甲信地方【4月15日～5月14日】

暖かい空気が流れ込みやすい時期があるため、向こう1か月の気温は高い。特に、期間のはじめは気温がかなり高くなる見込みである。

気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすいため、向こう1か月の降水量は平年並か多く、日照時間は平年並か少ない。

○1か月の平均気温、降水量、日照時間の出現確率 (%)

区分	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
平均気温	10	30	60
降水量	20	40	40
日照時間	40	40	20

2 予報の根拠にかかる気象要因

(+)は発生を増加させる要因、(-)は発生を減少させる要因を示す。

Ⅲ 麦

1 赤かび病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 麦類の生育は、農業試験場調査では、大麦（ファイバースノウ）、小麦（シラネコムギ）ともに立茎期はほぼ平年並であった。
 - ② 気象要因（+） 向こう1か月の気温は平年に比べ高く、降水量はほぼ平年並か多いと予想されている。
- (3) 防除上の留意点
- ① 開花期に曇雨天が続くと多発しやすい。
 - ② 重点的な防除時期は最も感染しやすい開花期である。開花期が早まると予想されるので、防除適期を逃さないように注意する。
 - ③ 開花期中に、曇雨天が続くなど多発が予想される場合は、1回目防除（開花期）から10～14日後に追加防除を行う。
 - ④ 今後の気象情報及び発生予察情報に注意する。

2 さび病・うどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 麦類の生育は、農業試験場調査では、大麦（ファイバースノウ）、小麦（シラネコムギ）ともに立茎期はほぼ平年並であった。
 - ② 気象要因（+） 向こう1か月の気温は平年に比べ高く、降水量は平年並か多いと予想されている。
 - ③ 昨年発生が多かった地域では、伝染源が多いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ① 過繁茂、生育が進んでいるほ場では発生しやすい。
 - ② 「農作物病害虫・雑草防除基準」（以下「県防除基準」という。）を参照し薬剤を選択する。赤さび病は品種の抵抗性に応じて薬剤を選択し（「県防除基準」p82参照）、開花期に赤かび病と合わせて1回防除する。
うどんこ病は、開花期の赤かび病、赤さび病防除によって被害を低減できるが、多発が予想される場合は止葉展開期にも薬剤散布を行う。
その他のさび病は、発生初期及び出穂期を中心に防除を行う。

Ⅳ 水稻

1 苗立枯病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 気象要因（+） 向こう1か月の気温は、平年に比べ高いと予想されている。
- (3) 防除上の留意点
- ① 極端な高温や低温、過乾や過湿は苗立枯病の発生を助長するため、適切な温度管理、水管理に努める。
 - ② ピシウム属菌による苗立枯病は、育苗初期の極端な低温により発生が助長される。また、育苗培土の適正pHは4.5～5.5であるが、pHが高いほど本病の発生が助長されるので、自家で培土を調整する際には、適正範囲内なるべく低くなるように調整する。
 - ③ リゾプス属菌による苗立枯病は、出芽や緑化期の高温・過湿により発生が助長されるので留意する。

2 ばか苗病

- (1) 予報の内容 発生量：平年並 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 近年における発生の主要因はプロクロラズ耐性菌であることが明らかとなり、発生地域では使用薬剤を変更した。
- (3) 防除上の留意点
- ① 購入した健全な種子を用い、種子消毒を必ず実施する。
 - ② 浸種時の液温が15℃以上になると発生が助長されるため、液温管理には留意する。
 - ③ 温湯消毒後の種子は汚染源（汚染された種子やわら等）との接触は避ける。
 - ④ 苗で発生した場合は、抜き取りを徹底する。
 - ⑤ 県内の複数地域でプロクロラズ耐性菌が確認されているため、スポルタック乳剤、スポルタックスターナSEの使用は控える。
また、ベノミル耐性菌は依然として県内広域で確認されているため、該当成分を含有する薬剤の使用は控える。

3 細菌性病害（もみ枯細菌病及び苗立枯細菌病）

- (1) 予報の内容 発生量：平年並～やや多い 発生時期：平年並
- (2) 予報の根拠
- ① 気象要因（+） 向こう1か月の気温は、平年に比べ高いと予想されている。

(3) 防除上の留意

- ①30℃を越える高温により著しく発生は助長されるため、催芽・出芽温度は28℃とする。この場合、32℃での催芽・出芽と比較して、出芽揃いまでおよそ1日遅くなる。
- ②育苗初期までは温度管理に留意し、30℃以上の高温に長時間遭遇させない。
- ③温水循環式催芽器を用いる場合、被害を増大させるおそれがあるので、温度管理に留意する。
- ④県内では、オキシリニック酸耐性のもみ枯細菌病菌が確認されているので、耐性菌の発生地域では、オキシリニック酸を含有する薬剤（スターナ水和剤）の使用を当面は控えて、代替剤を使用する。

V りんご

1 赤星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
 - ②りんごの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①りんご園周辺で中間宿主であるビャクシン類が多いところでは留意する。
 - ②小生子が飛散する開花期～落花20日頃が、重要な防除時期である。

2 うどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①全般に越冬伝染源量は、平年並と予想される。
 - ②りんごの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①被害病花そう（芽しぶ）は、せん除して土中に埋める。
 - ②発生が多い場合は、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

3 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①全般に越冬伝染源量は、平年並と予想される。
 - ②須坂市（果樹試験場）でのリンゴ黒星病菌子のう胞子飛散は、4月5日～10日の間で認められた。りんごの生育も平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。

(3) 防除上の留意点

- ①薬剤耐性黒星病菌の定着・拡散を防止するため、「県防除基準」を参照し、薬剤を選定する。
- ②展葉期～5月下旬までの防除が重要であるので、防除間隔をあけすぎないように、降雨状況等を勘案して定期的に防除する。

4 腐らん病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①伝染源量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①園内の点検に努め、早期発見・治療に努める。
 - ②病斑の削り取り後は、農薬登録のある塗布剤で必ず処理する。
 - ③枝幹部にも薬剤が十分かかるように散布する。

5 アブラムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬量は、平年並と予想される。
 - ②りんごの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①葉が巻いてからでは十分な防除効果が得られないので、発生初期の防除を心がける。

6 キンモンホソガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬世代成虫の発生量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①発生が多い場合は、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する（蚕毒に注意）。
 - ②昨年、発生が多かった地域は越冬密度が高いと予想されるので注意する。
 - ③今後のフェロモントラップ調査による誘殺状況に注意する。

7 ナシヒメシクイ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬幼虫量は、平年並と予想される。
 - ②越冬世代成虫が、平年と比べやや早く誘殺されていることから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①心折れの被害がみられたら、切除して焼却する。

8 リンゴハダニ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ①巡回調査では、短果枝の越冬卵が東信地域、南信地域、中信地域、北信地域の一部でみられたが、越冬卵量及び越冬成虫量は平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①発生がみられる場合は、落花直後に殺ダニ剤を散布する必要があるが、休眠期にマシン油乳剤を散布していれば、通常この時期の防除は必要ない。
- ②防除は、散布むらが生じないように散布する。

9 リンゴコカクモンハマキ（ハマキムシ類）

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
- ①越冬幼虫量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①発生が多い場合は、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する（蚕毒に注意）。

VI なし

1 赤星病

- (1) 予報の内容 発生量：**やや多い** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
- ①越冬伝染源量は、平年と比べやや多く、胞子の飛散時期は前年と比べやや早いと予想される。
- ②なしの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①生育に合わせて薬剤散布を行い、防除が遅れないように留意する。

2 黒星病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
- ①前年、発生が多かった園地では、伝染源量はやや多いと予想される。
- ②なしの生育は、平年と比べやや早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①生育に合わせて薬剤散布を行い、防除が遅れないように留意する。
また、落花直後の防除との間隔をあけすぎないようにする。

②春先は、展葉や枝の伸長が少なく、薬液が付着しにくいので、場合によっては手散布を行い、散布むらが無いようにする。受粉樹も防除する。

3 黒斑病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
- ①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
- ②なしの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①特に重要な防除時期は、開花直前～袋掛け前までである。
- ②生育に合わせて薬剤散布を行い、防除が遅れないように留意する。
また、防除間隔をあけすぎないようにする。

4 ハダニ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
- ①巡回調査では、短果枝の越冬卵が南信地域、中信地域の一部でみられたが、越冬卵量及び越冬成虫量は平年並と予想される。
- ②なしの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①発生が多い場合は、「県防除基準」を参照し、殺ダニ剤を散布する。

5 リンゴコカクモンハマキ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
- ①越冬幼虫量は、平年並と予想される。
- ②なしの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
- ①発生が多い場合は、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する（蚕毒に注意）。

VII もも（ネクタリンを除く）

1 せん孔細菌病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
- ①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
- ②ももの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。

(3) 防除上の留意点

- ①第一次伝染源である春型枝病斑は見つけ次第、必ずせん除し、埋没処分等を行う。春型枝病斑は落花期頃からみられるようになるので、園内を点検する。
- ②発生が多い園では、ボルドー液の散布が重要である。
- ③「県防除基準」を参照し、落花期以降に抗生物質剤を散布する（使用時期に注意）。これらの剤は薬剤耐性菌出現の恐れがあるので、使用回数等に注意する。
- ④防風対策を行う。

2 縮葉病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
 - ②ももの生育は、平年と比べ早いことから、発生時期はやや早いと予想される。

3 ナシヒメシンクイ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬幼虫量は、平年並と予想される。
 - ②越冬世代成虫が、平年と比べやや早く誘殺されていることから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①心折れの被害がみられたら、切除して焼却する。

4 コスカシバ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬幼虫量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①幼虫の寄生がみられたら、虫孔から針金を差し込み刺殺することは有効である。
 - ②発生の多い園地では、交信攪乱剤（スカシバコンL）を設置する。

5 モモハモグリガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**やや早い**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬成虫量は、平年並と予想される。
 - ②越冬世代成虫が、平年と比べやや早く誘殺されていることから、発生時期はやや早いと予想される。
- (3) 防除上の留意点

①越冬世代成虫は、4月中下旬頃から発生がみられるので、成虫の発生状況や幼虫の寄生状況に注意し、適期防除に努める。

②「県防除基準」を参照し、成虫発生初期に遅れないよう防除する（蚕毒に注意）。

6 カメムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬成虫量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①発生が多い場合は、「県防除基準」を参照し防除する。剤によっては、5月に散布すると葉に葉害が生じることがあるので注意する。

VIII ぶどう

1 晩腐病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①「県防除基準」を参照し、発芽直前から定期的に防除する。

2 黒とう病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬伝染源量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①欧州系品種（シャインマスカット、クイーンルージュ[®]等）は、罹病性が高い。
 - ②発芽前にデランフロアブルまたは石灰硫黄合剤により防除するとともに、展葉2～3枚頃の生育期には、「県防除基準」を参照し防除する。

3 ブドウトラカミキリ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①越冬幼虫量は、平年並と予想される。
- (3) 防除上の留意点
 - ①被害枝を見つけたら切除し、必ず焼却する。

Ⅸ う め

1 かいよう病 ※

- (1) 予報の内容 発生量：－ 発生時期：－
(2) 予報の根拠
※本病については、令和5年4月から巡回調査を開始。
前年や平年の調査データがなく比較できないことから、発生量及び発生時期は「－」とした。
(3) 防除上の留意点
①展葉初期から約1か月間が防除適期であるので、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

2 黒星病 ※

- (1) 予報の内容 発生量：－ 発生時期：－
(2) 予報の根拠
※本病については、令和5年4月から巡回調査を開始。
前年や平年の調査データがなく比較できないことから、発生量及び発生時期は「－」とした。
(3) 防除上の留意点
①4月下旬から5月中旬が防除適期であるので、「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

X 野 菜

1 施設果菜類の灰色かび病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、現在のところ発生はみられていない。
(3) 防除上の留意点
①昼夜の温度差が大きくなり、結露量が増えると発生しやすくなる。
②施設内の換気を十分行い、除湿を図る。除湿機の利用は、ハウス内の湿度上昇抑制に有効である。
③発病葉及び発病果は見つけ次第、除去する。
④「県防除基準」を参照し、定期的に防除する。

2 施設きゅうりのうどんこ病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、現在のところ発生はみられていない。
(3) 防除上の留意点

- ①「県防除基準」を参照し、発病を認めたら直ちに防除する。
②下葉で、発病したものは摘葉する。

3 アブラナ科野菜のコナガ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、現在のところ寄生は確認されていない。
(3) 防除上の留意点
①「県防除基準」を参照し、育苗期後半(セル成型育苗)あるいは定植時に、殺虫剤(粒剤)を散布する。

4 レタス類のナモグリバエ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、現在のところ寄生は確認されていない。
黄色粘着板によるトラップ調査では、小諸市(野菜花き試験場佐久支場)では、3月第2半旬に初誘殺された。
(3) 防除上の留意点
①苗床での防除を徹底する。
②育苗施設では、黄色粘着シートを設置し、成虫の捕殺を図る。
③「県防除基準」を参照し、防除する。

5 アスパラガス茎枯病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、現在のところ発生はみられていない。
(3) 防除上の留意点
①前年の切り株に残存する病原菌が一次伝染源となり、降雨時の泥はね等により感染する。地表面の切り株が残らないよう除去し、敷きわら等によって泥はねを防ぐ。

6 アスパラガスのジュウシホシクビナガハムシ

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
(2) 予報の根拠
①巡回調査では、現在のところ寄生はみられていないが、例年山沿い等の一部のほ場では、萌芽期から寄生がみられている。
(3) 防除上の留意点
①発生がみられた場合は、「県防除基準」を参照し、萌芽初期以降に防除する。
②山沿いのほ場は発生しやすいので留意する。

7 タマネギべと病

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**

- (2) 予報の根拠
 - ①巡回調査では、現在のところ寄生はみられていない。
- (3) 防除上の留意点
 - ①「県防除基準」を参照し、防除を行う。
 - ②発病葉は二次伝染源となるので、早期に除去し、集めて土中に埋める。

8 野菜・花き類のアザミウマ類・アブラムシ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①巡回調査では、現在のところ寄生はみられていない。
- (3) 防除上の留意点
 - ①発生がみられた場合は、「県防除基準」を参照し、多発する前に防除する。

9 野菜・花き類のハダニ類

- (1) 予報の内容 発生量：**平年並** 発生時期：**平年並**
- (2) 予報の根拠
 - ①巡回調査では、現在のところ寄生はみられていない。
- (3) 防除上の留意点
 - ①早期発見に努め、発生初期に防除する。
 - ②「県防除基準」を参照し、防除する。

10 フェロモントラップ誘殺状況

オオタバコガは、塩尻市（野菜花き試験場）、須坂市（農業試験場）の県発生予察ほでは、4月第1半旬現在で誘殺されていない。

コナガは、塩尻市（野菜花き試験場）の県発生予察ほでは、4月第1半旬に誘殺された。小諸市（野菜花き試験場佐久支場）の県発生予察ほでは、第2半旬に誘殺された。